知っているモートンによる麻酔の誕生に始まり，麻酔器ができ，各種吸入麻酔薬が開発され，それぞれの気化器が用いられた．現在世界中で最も使用されている吸入麻酔薬セボフルレンは米国で生まれ日本で育った薬剤である．この間，上気道閉塞を防止するための気道確保の手段として喉頭鏡や気管チューブ，ラリンジアルマスクエアウェイが開発・使用された．一方，手術中の痛みを取り除く全身麻酔は，人間の持っている意識という最も良いモニタリング機能を失わさせる．そのため，患者をモニタリングすることは，麻酔科学の重要な側面となった．最初，モニタリングは麻酔科医の感覚に頼っていた．麻酔専門医は脈を指で感じながら，呼吸と意識の状態を目で観察したと言われており，これは洋の東西を問わなかった．その後，パルスオキシメータをはじめとした患者安全のためのモニターが発展し，患者の安全性の向上に役立っている．この事は，手術・麻酔を離れて一般病棟や在宅医療にまで広がっている．

一方，麻酔科医以外の人々には，手術室の変遷が興味深いのではないかと思う．1960年代と2000年代の手術室の手術室を再現し，関連機器や備品の変遷をわかりやすく解説・展示している．麻酔科医が気管挿管を行い，全身麻酔の管理をするという，現代ではありふれた光景が始まったのが1960年代であった．この頃，大部分の手術室は壁面・床面ともにタイル張りが主流で，爆発性のある麻酔薬が用いられており，麻酔科医は五感に頼って患者の状態を観察した．大きなガラス製のアンプルにゴム管をつなぎ輸液を行うことが当時の最新鋭であった．2000年代になると，冷暖房完備のクリーンルーム手術室となった．安全装置が内蔵され，コンピュータ制御された麻酔器が登場し，各種生体情報も統合されモニターとして麻酔器に装着されるようになった．輸液剤の種類も増加し，輸液バッグ，回路がプラスチック性のディスポーザブル製品になった．以上，画像を多く用いて，日本における麻酔を含めた手術医学の進歩をわかりやすく説明している．この冊子を読んだ後は是非現地を訪れてほしい．現地では，最新（2020年代）の手術室の様子もバーチャルで再現している．他にも興味深いものが多く置かれている．

この小冊子のもとになったのは，麻酔資料館・博物館が十数年の間に収蔵・保存した物品である．麻酔科学会の重要文書と約670点の麻酔関連機器・器具はもちろんのこと，貴重書を含む約6900点の和洋の書籍・雑誌と視聴覚資料が収集され，その一部が展示されている．これらの資料を分類し，解説を加えるために麻酔博物館委員会・博物館館員ボードが委員会として存在する．今回の小冊子を作成するにあたって，これらの委員会会員が労苦をいとわず努力を重ねた．この事を高く評価したい．現在，内科，外科など日本医学会の中の数ある診療科（標榜科）の中で，このようなまとまった資料収蔵・公開を行っている施設を公益法人である学会が運営しているのは麻酔科学会のみである．今後，麻酔科学会以外の診療科でも博物館を設立して，個々の診療科の歴史を正しく後世に残すことができれば，日本医史学会の発展にもつながると思う．

（土手健太郎）

［麻酔博物館，〒650-0047 兵庫県神戸市中央区港島南町1丁目5番2号 神戸キメックセンタービル3階，TEL. 078（306）5945，2021年12月，B5判，52頁，非売品（来館者に進呈）］

田畑正久・桑原正彦・富士川義之・松田正典・佐々木秀美・栗田正弘・土屋　久 著
『富士川游の世界――医学史，医療倫理，そして宗教――』

富士川游（1865～1940）は，不朽の名著『日本医学史』でその名を広く知られる医学者・医学史研究者である．『日本医学史』は，増補修正を加えられた上で『日本医学史綱要』として覆刻され，

現在の医学史研究でもしばしば引用される．

富士川は，浄土真宗の安芸門徒として，浄土真宗こそが医学とともに万人に寄り添う教えであると考え，念仏の教えを広めた．富士川は，特に後半生において宗教活動を行い，仏教に関する著作も残している．富士川自身やその医学史研究について検討するにあたり，仏教，特に浄土真宗の信仰との関連には着目する必要があるだろう．この点については，本書中の「略年表と主な宗教関連著作」からも明らかである．本書では，富士川游の顕彰を目的とし，多くの史料や体験談に基づき，安芸門徒としての生涯と事蹟について論じられている．

本書の構成は，以下の通りである．

まえがき　横倉義武
現在において富士川游を顕彰する意義　田端正久
富士川游の世界　桑原正彦
祖父・富士川游のこと　富士川義之
富士川游の宗教的背景を尋ねて　松田正典
富士川游と医学・医療観　田畑正久
仏教精神と看護――富士川游の思想探究を通して　佐々木秀美
実地医家の宗教的診察――現代医療の現場から　栗田正弘
略年表と主な宗教関連著作　土屋久
あとがき　桑原正彦・田畑正久

本書には，富士川游と直接に会い，交わした貴重な会話などが綴られている論考や，孫にあたる英文学者の富士川義之氏による論考も含まれている．それゆえ，本書自体が，のちに行われるだろう歴史学の面からの「富士川游研究」における貴重な「史料」ともなり得ると言える．また，これまでさほど重点的に論じられてこなかった，富士川游と浄土真宗の関係について多くの紙幅を割き分かりやすく述べられている点も，本書の価値を大いに高めていると言えるだろう．

本書中の田端正久「現在において富士川游を顕彰する意義」では，富士川が「浄土真宗こそ医学と協力して全ての人に寄り添う教えであるとの確信を持ち，老病死を受容して人間を丸ごと救う念仏の教えを勧め」た，と指摘されている．もともと，前近代では，医学と仏教の協力関係は当然のものであった．たとえば，平安貴族が病になると，医師は薬の投与や灸などをし，僧は祈禱をしていた．また，中世になると，僧が医学の知識を身につけ，僧医として大いに活躍した．まさに僧医は，心と体を看るエキスパートだったと言える．臨終の際には，往生へと導く善知識と呼ばれる僧が招かれ，臨終行儀（臨終の作法）が行われた．このように，医師と僧は，病気の治療と病人の救済を協力して行っていたのである．

富士川が傾倒した親鸞は，病気治療の祈禱を積極的に行うことはなかったものの，信心を得た者は必ず極楽往生できると説き，病や死を受容して念仏によって救われる道を示した．親鸞は，正嘉元年（1257）頃に門弟宛に出した書簡の中で，東国在住の門弟覚信が親鸞のいる京へ上る途中で病気になり，周囲の者から東国へ帰るように勧められたものの，病をおして都へ来たことをしたためている．親鸞は，病に苦しみつつ京へたどり着いた覚信が「死するほどのことならば，帰るとも死し，とどまるとも死し候はむず．またやまひはやみ候はば，帰るともやみ，とどまるともやみ候はむず．おなじくは，みもとにてこそ終り候はば終り候はめ，とぞんじて参りて候ふなり」（死ぬほどの病気であるのならば帰っても死に，留まっても死ぬことでしょう．また，病気が治るものであるならば，帰っても治り，留まっても治るでしょう．どうせ同じことであれば，親鸞聖人のおそばで死ねるものならば是非そうしたいものだと覚悟して参ったのです）と言ったことを賞賛している．賞賛した理由は，覚信の言が，堅固な信心をもって病や死を受容するものだったからだろう．富士川は，病や死に対する親鸞のこのような姿勢に感銘を受けたのだと考えられる．

本書でたびたび述べられているように，医療と仏教は現代ではかけ離れたものであるかのように見られがちであるが，ともに四苦（生老病死）の克服を共通の課題としている．飛躍的に進歩した

医療によって，病気を治したり死期を先延ばしたりすることはできても，死から免れることはできない．富士川は医療の限界を凝視し，医療に携わる者は仏教的素養を身につけるべきである，とする立場を取っていた．富士川が指摘するように，これまでの仏教の長い歴史の中では，病や死への恐れをいかに超克するかが課題とされてきた．中世に医師と僧（と陰陽師）が共同で行ってきた医療は，現代では劣った医療であるかのように見なされがちだろう．しかし，これを非科学的であると一蹴するのではなく，現代においてその意義こそを顧みるべきなのではないだろうか．

本書は，医学史研究のパイオニアである富士川游を顕彰するのみならず，安芸門徒としての富士川を論じることによって，現代の医療，さらには現代社会に大きな問いを的確に投げかけている．これからの医療はいかにあるべきか，医療者はどのように患者に向き合うべきなのか，現代の医療でなおざりにされている諸問題への解決の手がかりが，本書には凝縮されていると言えるだろう．

（小山　聡子）

［本願寺出版社，〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル，TEL. 0120（464）583，2021年10月，B6判，236頁，1,600円＋税］

東京国立博物館 編
『日本最古の医学書　国宝「医心方」の世界』

本書は副題に「全巻修理完了記念」のタイトルを冠し，令和4年（2022）2月8日～3月21日に東京国立博物館本館特別1・2室で開催された特集展示「全巻修理完了記念 日本最古の医学書 国宝『医心方』の世界」の図録として刊行された書である．

丹波康頼（912～995）は982年に『医心方』全30巻を編集し，984年にこれを時の円融上皇に献上したと伝える．日本現存最古の医学書であり，質も量も優れ，現存品も執筆当時に近いものが伝来する．

伝存古写本には複数の系統があるが，平安時代の古鈔に半井家本と仁和寺本の2系統があり，いずれも国宝に指定されていている．国宝指定の医薬書はいくつかあるが，日本人の著作で国宝に指定される医書は『医心方』が唯一である．仁和寺本は6分の1の5巻分しか現存せず，書写の古さからしても全30巻が揃っている点からも，半井家本は最善本として計り知れない価値を有している．

朝廷に献上された『医心方』は秘蔵されたのち，正親町天皇（在位1557～86）のとき半井瑞策（光成，1507～77）に下賜され，半井家に秘蔵．幕末の1854～62年に一時影刻出版のため幕府医学館に貸与されたのちも再び半井家に蔵されたが，編纂から千年後の1982年に国・文化庁に譲渡され，撰進一千年の1984年に国宝に指定された．わが日本医史学会は日本東洋医学会・東亜医学協会と計り，これを記念して同年10月10日，京都泉涌寺内今熊野観音寺の医聖堂において盛大な式典を催したものである．あれから40年近い歳月が経過した．

1990年には管理が国から東京国立博物館に移り，東博本とも称されるようになった．2015年，東京国立博物館は独立行政法人国立文化財機構に寄せられた寄附金を原資とする文化財保存活用基金によって『医心方』修理事業に着手．修理は一般社団法人国宝修理装潢師連盟加盟工房の株式会社半田九清堂と株式会社修護が担当し，足掛け5年，1億3700万円の費用をかけて完成した．

本書には，序論として冨坂賢（東京国立博物館）「刊行にあたって」，総論として冨坂賢「東博本『医心方』とはなにか」，特論として佐伯勇成・下田純平（半田九清堂）「東博本『医心方』の修理について」の記述がある．装潢師による特論はカラー図版を多数用いて修理の具体的過程を説明しており，その様子がよくわかる．

本書の特徴は後半3分の2の頁を割いて満載されるカラー図版篇にある．「『医心方』30巻1冊」